Alter
安全な食べものネットワーク オルター
since1975

ほんものをたべよう B

Alter Weekly Order Catalogue

2020.10月4週号

提出日 10/ 火 13 水 14 木 15 金 16
配達日 10/ 火 20 水 21 木 22 金 23
翌々週分配達日 10/ 火 27 水 28 木 29 金 30

オルターの提案

本当に安全な食べものを手渡すために

- ○「だれが・どこで・どのようにつくったか」の情報を日本一公開します。
- ○「国産」「無農薬」にこだわり、日本の伝統食を守ります。
- ○原料段階・飼育段階からポストハーベスト農薬、遺伝子組み換え、放射能汚染、トランス脂肪酸、食品添加物などを徹底的に追放します。
- ○プラスチック容器・レトルト食品を追放します。

あか牛 BEEF

安全なエサで健康に育てたあか牛

黒毛和牛以上のうま味

菊池農場 /(株)共同 熊本ミートセンター

文責　西川 榮郎(NPO 安全な食べものネットワーク オルター 代表)

菊池農場の久川 浩一郎社長

貴重種あか牛

福岡県や熊本県などに活動拠点を持つ消費者団体、九州産直クラブ（吉田 登志夫代表）が会員から「たべもの夢基金」を集めて建設した菊池農場（久川 浩一郎社長）は、絶滅危惧種であった貴重な在来種「あか牛」（褐色和種）を安全なエサで育てています。

「あか牛」は耐寒・耐暑性に優れ、放牧に適し、性格がおとなしく飼育しやすい、病気に強い牛です。草だけで育ち、肉質はさらりと溶ける脂身で、たくさん食べても胃が重くならない赤身肉です。適度の脂肪分を含み、うま味は黒毛和牛と比べて多く、やわらかさ、ヘルシーさを兼ね備えています。

菊池農場は熊本県菊池市の山中、標高400mほどの地にあります。母牛はパドック25頭、山の放牧場で５頭、肥育牛はパドック20頭、ほか仔牛を入れて約70頭のあか牛を飼っています。

牛本来のエサ、草主体で育てています

菊池農場の「健康あか牛」の飼料は、

（１）牧草…「イタリアン」を無農薬で自家栽培しています
（２）河川敷草…公共事業で刈り取りした草
（３）自家指定配合飼料（非遺伝子組み換え飼料）
　…（株）荒川飼料で九州産の麦・飼料用トウモロコシ・大豆カス・フスマ・飼料用コメを指定配合しています

です。その他、自家製の自然栽培稲ワラも与えています。ミネラル不足を補うため、鉱塩は常に置いています。

生後３～４ヶ月の仔牛は、母牛につけて母乳をメインに育てます。母牛給餌の河川敷草も食べます。

繁殖母牛は河川敷草をメインに与えています。補助として、カロリー控えめのNON-GMO（非遺伝子組み換え）指定配合飼料を日に１頭当り２kg、ビタミン補給として、アルファルファミールを朝、１頭当り200g程度与えます。後半２ヶ月には、胎児が大きくなりますので、栄養失調にならないように指定配合飼料を多めに与えます。トウモロコシを減らして、蛋白質が多い大豆カスを増やします。

肥育牛には、麦20%、大豆カス５%、トウモロコシ40%が基本です。前期10ヶ月までは、１日当り、自家無農薬牧草イタリアン10kg程度、NON-GMO指定配合飼料６kg、後期24ヶ月までは１日当り、河川敷草ロール13kg程度、NON-GMO指定配合飼料８kgを与えます。

牛にやさしい飼い方

母牛繁殖で仔牛をとり、24ヶ月肥育するという「一貫飼育法」を行っています。出来るだけ最高の環境で育てるという「アニマルウェルフェア」（動物福祉の考え方）で飼っています。

生後３～４ヶ月まで仔牛は母牛と一緒に阿蘇山の麓の牧草地で放牧します。その後、肥育牛は開放型のパドックですごします。

パドックの敷料は熊本県阿蘇・大分県高森産杉のオガクズです。

熊本地震被災を乗り越えて

パドックは、2016年４月の熊本地震で倒壊し、牛２頭が死亡し、数頭が負傷するという被害を受けました。2018年11月に、再建されました。

人にやさしい工場

菊池農場から出荷される健康あか牛は月１～２頭です。屠場は人吉市にあります。

精肉は（株）共同 熊本ミートセンター（山下 敏文社長）で行っています。

武藤さんの「走る豚」の精肉も、この工場で行っています。最新設備が整った衛生的な工場です。精肉された牛肉は急速冷凍されます（使用時は冷蔵庫でゆっくり解凍してください）。

障がい者の人が30人も働いています。オルター仕様のウインナーの開発にも取り組んでいただいています。

自分たちが育てたい牛はあか牛だった

菊地農場は九州産直クラブによって2003年に設立されました。当初、ジャージー牛の肥育から取り組みました。そこでサシ（霜降り肉・脂肪肝）にするためにビタミン欠乏症にして失明させるほどの不健康な飼い方に出会い、たいへん衝撃を受けました。それから自分たちが育てる牛はどんな牛であるべきかの模索と勉強を始めました。牛本来の草食動物に立ち帰り、サシを入れ霜降りにするための穀物主体の給餌方法をやめ、たどり着いたのが「肥後のあか牛」でした。熊本地方で歴史的に阿蘇山系で放牧され、その頃は絶滅危惧種として細々と飼育が続けられていた「あか牛」こそが、牛本来のエサである草を食べて育つ、自分たちが望む牛であると確信しました。以来、肥後のあか牛飼育に励み、牛本来の赤身がおいしい健康あか牛を実現しました。

菊池農場の「健康あか牛」

●品種

褐色和牛（あか牛）在来種

●エサ

（1）牧草　　無農薬で自家栽培したイタリアン。ラップサイレージにしています。
（2）河川敷草　　公共事業で刈り取りした草。ラップサイレージにしています。
（3）自家指定配合　　NON-GMO（非遺伝子組み換え）（株）荒川飼料
　九州産　麦
　九州産　デントコーン飼料用（トウモロコシ）
　阿蘇産　大豆カス
　九州産　小麦殻（フスマ）
　九州産　飼料用コメ
（4）鉱塩

●飼い方

牛の月齢によって放牧および開放型パドック飼育を行っています。パドックの敷料は熊本県阿蘇山・大分県高森産杉のオガクズ。購入先は梁地さん。

牛のウイルス病に対する予防注射は、母牛は年１回、初期母牛は年２回、仔牛は３ヶ月に１回行っています。

P2～3で菊池農場の健康あか牛をご紹介。